時の鳥籠

下

The Endless Returning II

浦賀和宏

KAZUHIRO URAGA

講談社文庫

講談社文庫

時の鳥籠(下)

浦賀和宏

講談社

|著者| 浦賀和宏　1978年生まれ。'98年、第5回メフィスト賞を受賞してデビュー。京極夏彦氏の絶賛を受ける。『彼女は存在しない』（幻冬舎文庫）は20万部を超えるベストセラーとなり話題となる。主な著書には『地球人類最後の事件』『生まれ来る子供たちのために』『萩原重化学工業連続殺人事件』『女王暗殺』（以上、講談社ノベルス）、『眠りの牢獄』（講談社文庫）、『彼女の血が溶けてゆく』『彼女の倖せを祈れない』（ともに幻冬舎文庫）などがある。本作は『記憶の果て』（上・下）に続く、安藤シリーズ第2弾。

時の鳥籠（とりかご）（下）
浦賀和宏（うらがかずひろ）
© Kazuhiro Uraga 2014

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2014年5月15日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277814-5

目次

Contents

地球の夜にむけての夜想曲
DARKSIDE OF THE STAR
7

後奏
33

解説 佐々木敦
422

講談社文庫

時の鳥籠(下)

浦賀和宏

講談社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

Contents

地球の夜にむけての夜想曲
DARKSIDE OF THE STAR
7

後奏
33

解説 佐々木敦
422

時の籠鳥

下

THE ENDLESS RETURNING

地球の夜にむけての夜想曲
DARKSIDE OF THE STAR

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

血。
赤い血。
カイ――。

トレンチコートのポケットに手を入れる。
カセットテープの感触。
『ＴＥＣＨＮＯＤＥＬＩＣ』
あの、カメラマンに借りたレコードからダビングしたカセットテープ。
聴きたいな、と思った。
でも再生する機械がない。
ラジカセぐらい――どっかにないのか。
俺はそう思い、辺りを見回す。
でもラジカセなんて何処(どこ)にもなかった。

夕暮れ時の公園。
俺はベンチに座っている。
辺りを見回す。

ガキが走り回っている。
その母親達は井戸端会議に勤(いそ)しんでいる。
何気ない、日常の一コマ。
当たり前の、風景。

気持ちが悪い。
胃の中が、変だ。
きっと飲みすぎた所為(せい)だろう。
あんなもの飲み慣れていないのに、調子に乗り過ぎた。

日が暮れた。
夜になった。
ガキも母親達もいなくなった。
寒かった。
腹が減った。
でも何をする気にもならなかった。
俺はベンチに座り続ける。

独りぼっちのアパートには――戻る気にはなれなかった。
ため息が出た。

「ねえ」
その声で、俺は顔を上げる。
――女。
彼女――？
違う。
髪の長い、女の子。
高校生みたいだ。
制服を、着ていたから。
「どうしたの？」
――どうしたのって言われたって。
どうもしないよ。
俺は答える。
「嘘」
――嘘じゃない。

「まるで恋人が死んだような顔をしてるよ」
俺はその言葉にゆっくりと頷(うなず)く。
ああ、そうだ。
「本当？」
恋人が死んだんだ。
「そう……」
女の子は俯いて少し黙って、また口を開いた。
「あなた、さっきからずっとそこに座っていたでしょう」
何で分かるんだ。
「私も、さっきからずっと向こうに座っていたから」
そう言って、女の子は向こう側のベンチを見た。
――さっきからこの女の子もここにいたのか。でも気付かなかった。この女の子は、まるで何処からか魔法のように現れたみたいだ。
「そんな変な顔して、見ないでよ」
どんな顔をしているのか、自分では分からない。
女の子はクスクス笑いながら、俺の隣に腰掛ける。
「あなた、名前なんて言うの」

シンイチ。
「私は、キョウコ」
キョウコ。
「うん、そう」
なあ、聞いていいか。
「うん、いいよ」
どうして、俺に話しかけてきたんだ？
その俺の問い掛けに、キョウコはニコニコして、
「私と同じだ、って思ったから」
同じ？
「そう、私と同じに、独りぼっちで何時間もベンチに座っていた」
——どうして。
「どうしてって？」
どうして、独りぼっちで何時間もベンチに座っていたんだ？
「じゃあ、そういうあなたは、どうして独りぼっちで何時間もベンチに座っていたの？」
別に——理由なんかない。

「私も、同じよ」
そう言って、女の子は――キョウコはクスクスと笑った。
俺は状況を少しだけ先に進めることにした。
寒いから、喫茶店にでも入らないか。
「それって、私のこと、誘ってるの」
ああ。
「正直ね」
正直さ。
「喫茶店に行って、それからどうするの？」
ホテルにでも行かないか。
キョウコは俺のその言葉で、笑った。クスクスとではなく、ゲラゲラと。
「あなた、本当に正直な人ね」
俺は自分をさらけ出す主義だから。
「あなた、変な人ね」
そう言って、またキョウコはゲラゲラと笑った。
こんな変な男に不用心に話しかけた自分の方がもっと変だということを、キョウコは忘れている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com